校園名：東京学芸大学附属竹早中学校

所在地：〒112-0002　東京都文京区小石川 4－2－1　　電話番号： 03-3816-8601

記載日：　2016 年 5 月 20 日　　記載者：勝岡幸雄　　記載者役職：副校長

本校の校風、おおまかな特色について：

本校の特色は３つの教育目標に表れています。中でも最も大きな特色は，教育目標の第一番目「自ら求め，考え，表現し，実践できる生徒を育てる」という目標にあります。教師は，各教科の実践研究家です。本校の使命の一つは大学と連携した実験・実証で，それにふさわしい教員を採用しているからです。

教師は，生徒にも「真の学び」をさせて，研究的姿勢を求めます。様々な考察をさせることはもちろん，その結果を適切に表現する工夫をさせています。それが表現されるのが，自由研究と卒業研究です。大学生の卒論に負けないような作品もあります。作品コンクールで文部科学大臣奨励賞を頂いた生徒もいました。

生徒が育む研究的姿勢は，学習だけでなく，生徒会活動や部活動，学校行事にも見られます。学校行事の多くの場面で企画・運営を生徒主体で行います。例えば運動会を例に取ると，全校生徒が係を分担し，３年生のリードで活動します。中心となるのが運動会準備委員で，各種目の企画・運営を行います。多少の失敗は気にしないで，試行錯誤からの学びを大切にしようという雰囲気が満ちています。

教育目標の第二は「他人の立場や意志を尊重できる視野の広い生徒を育てる」です。友達の個性を互いに尊重し，その良さを認めようとする校風があります。授業はもちろんのこと，自由研究や卒業研究、そして学校行事などで，生徒が主体性を発揮して表現する機会が多いので，友達の良さに気づきやすいのでしょう。

それもあってか，個性豊かな生徒が多いように思われます。校風を一言で言えば，自由で大らかであることです。教師は，規則だけではなく，生徒の良識に訴えて，自分の行動を見直させるようにしています。こうして，教師と生徒の信頼関係ができあがります。その基本は，挨拶であり，生徒が挨拶を自然に行っていることも大きな誇りです。

本校の教育目標の第三は「心身ともに明るくたくましい生徒を育てる」です。生徒が主体性を発揮しやすい場である部活動を奨励しています。本校の部活動の特色として，その多様さを指摘できます。運動部には，チャンピオンスポーツとして試合直前に認めている土日の活動を活発に行う部活と，スポーツを楽しむことに主眼をおいて活動する部活があります。文化部では，テレビでも報道されたことのある人間倶楽部や，様々な実験を行うオムニサイエンス部などといったユニークな部があります。

運動部の活躍もめざましく，陸上，バスケットボール，バレーボール，卓球，水泳，サッカー等の部活は都大会に出場したり，ジュニアオリンピックの選手や東京都の代表選手に選ばれたりしています。練習量は多くはありませんが，かつて全国 3 位になるといった成果を上げた部活もあります。

このように，学習と生活の両面で，教師が生徒の研究的姿勢を育み，また，上級生や友達からそれを学ぶという「教師が支える，生徒たちの創造力による文化創造」に本校の伝統的な特色があるといえます。

本校の卒業生の活躍状況について：

中学校として，卒業生の具体的な追跡調査は行っていません。卒業生の状況は同窓会が把握しています。しかし，卒業生の多くが社会で活躍しているのは分かっています。多くの卒業生は，学級・学年等の同窓会があるとき，あるいは個人的な人生の節目に本校を訪ねてくれます。こうしたときに様々な情報をもたらしてくれます。また，同窓会との繋がりが強いのも理由の１つでしょう。

具体的には，学校行事や教育活動に積極的に同窓会が協力・参加・支援してくれています。特に総合学習では，卒業生の講演，情報機器の指導，を通して様々な分野で活躍する先輩が後輩のために力を貸してくれます。

本校勤務経験者の教員が公立学校・教育委員会などへ戻った後の活躍状況について：

本校の教員は東京学芸大学任用として勤務しています。ですから，基本的に公立学校・教育委員会で勤務することはまれです。しかし，東京都等との交流が行われるようになってから，少数ですが，公立学校や教育委員会で活躍される先生がいます。

また，大学教員となり教育界で大きな成果を上げている先生が多いといえます。その方々には，本校の授業研究等で協力研究者になって頂き，研究推進に力を貸して頂く機会が多くあります。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

(1)「主体性を育む幼・小・中連携の教育」

本校が最も力を入れている研究が，幼稚園・小学校・中学校の連携教育です。異校種間連携教育や一貫教育は，多くの学校で取り組まれ始めています。本校では，この研究に長く取り組み，全国へ向けて多くの成果を発信してきました。

竹早地区は，同じ敷地に幼稚園・小学校・中学校があるという環境を活かして，幼小中連携教育を進めています。テーマは「主体的に学び続ける人として成長する園児・児童・生徒の育成」です。キーワードは「主体性」で，各学校園の教育目標に共通する言葉を採りました。本研究は，使命の一つとしての「地域の研究モデル校」の視点を踏まえた研究でもあります。

図１

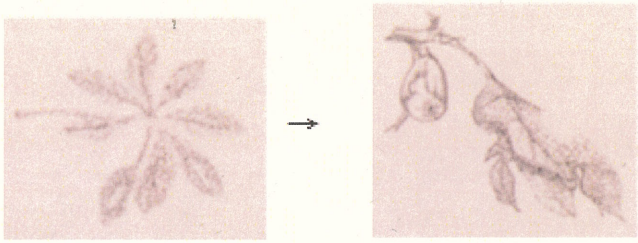
竹早地区の研究主題「主体性を育む幼・小・中連携の教育」の特徴は，幼小中 11 年間の子どもの様子を全教員で見とりその特徴をまとめ（図１）共有したことにあります。このことで，教育実践に見通しが立ち，連携カリキュラムが作成でき，子どもの発達段階に合った教材や指導についての一貫性が創造できたところです。連携カリキュラムでは「各教科領域」における配慮事項が記され，教師はそれに当てはまっ

た配慮を授業の中に組み込み教材を選定し，実践を行います。

具体的な例として，理科の「点描画スケッチ」を挙げることができます。これは，観察眼の滋養をねらいとして小中の理科部が，小学５年生と中学１年生に与えている課題です（図２）。それぞれの発達段階を踏まえた配慮事項に沿って，先輩の作品を見せて学び合いをさせることで，中学１年生の半数ほどが高い評価の作品を完成させます（図３）。

小学５年生は中学１年生の作品に触れ，主体性が高まり（写真①），真剣に取り組みます。「子どもの成長にあった教材・授業が主体性を育む」良い例だと考えています。

こうした各教科領域での取り組みの成果は毎年開催する公開研究会で報告しています（写真②）。平成 27 年度の公開研究会では，教育委員会・管理職の方々の参加が多く見られ，本地区の存在意義の高まりが感じられました。これも，本地区の研究手法が現在取り組まれている異校種間連携や一貫教育に多くの示唆を示すことができている査証だと考えています。



小学５年生　　中学１年生

図２

図３

写真①

写真②

(2) 包摂型社会を目指す教育実践の取り組み

平成 26 年１月 17 日に施行された「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が制定され，同年８月 29 日には「子どもの貧困対策に関する大綱」が閣議決定されています。また，東京学芸大学と足立区や小金井市が連携して『「経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒」へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクト』も取り組まれました。竹早地区学校園には、附属学校としての協力が求められ，支援のための教育プログラム作成が進められてきました。本校では，社会科・家庭科，保健体育科，養護の３領域で平成 27 年度より取り組みを始めました。

ここでは具体例として，社会科・家庭科の実践を紹介します。上述した流れの中で，学校でも相対的貧困について正しく理解し，共に助け合う包摂型社会を作ろうという意識を中学３年間を通して育成していく必要があると考え，貧困を断ち切りこれからの社会の中で自立して逞しく生き抜いていくことができる生徒を育成していくための実践に取り組んでいます。

具体的には，相対的貧困（社会的事象）の理解を図る部分を社会科が，それを受けて具体的な生活上の工夫を考えさせる部分を家庭科が担うように構想されています。そこで、社会科では公民分野の経済単元で家計の経済活

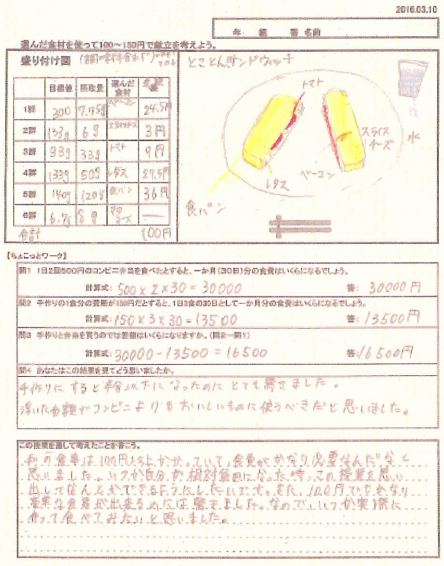


図４

動の様子やその意義を取り扱い，家庭科では食生活と自立単元の中で具体的な消費をイメージしながら，限られた収入でどのように消費に振り分けるか実感を伴った理解ができるように学習することを目指しました。

特に家庭科では「100円で朝食を作ろう」と題し，限られた予算で健康的な食生活を送るための朝食の献立を考える実践（図４・５）がなされました。相対的貧困とはどのような状況かを学習し，誰にでも起こりうるリスクであることを理解した生徒が真剣に献立を考える姿から「包摂型社会を目指す教育実践に大きな意義を感じた。」と，担当した教師からの声がありました。

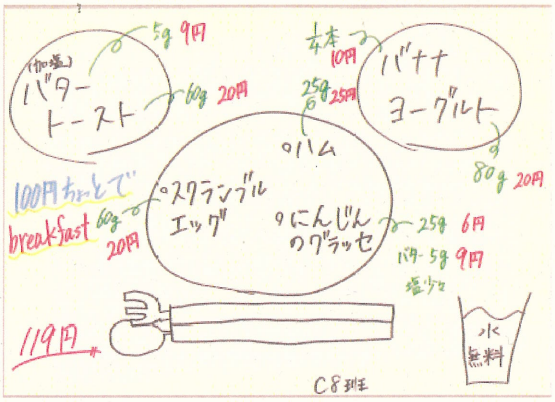


図５

地域において、現在、本校ははどのような存在であると考えるか：

本校が開催する公開研究会・授業研究会は，地域の公立中学校全てに通知し，研修の場としても活用されています。また，本校教員は文京区教育研究会のオブザーバーとしての参加を認められ，中学校の先生方との交流を深めています。こうした取り組みは少しずつですが地域の各中学校や教育委員会にも認知され，これまでに区の研修会講師や研究会の提案者としての要請を受けるなどの実績を積み上げています。こうした経験を通して，本校教師の地域への貢献意欲も高くなってきました。

附属学校の存在意義、本校の存在意義について：

附属学校はこれまでの教育や研究成果の蓄積を具体的にどのように社会へ還元できるかが問われています。本校もきちんとアピールしていかなければならいと考えています。具体的には，次のような実践を教育活動や研究活動を通して試みています。

(1)真のリーダーの育成

本校は文武両道を奨励し，実践してきました。これは，真のリーダーとしての必要不可欠な素養であると考えているからです。実際に来校された方々から，陳列されている文武に関する賞状やカップ（写真③）に対する賞賛の言葉を頂きます。

大きな力は，生徒同士の学び合いから生まれます。これは，日常の活動の中から育まれるもので，教師が教え込むだけでは困難です。

写真③

(2)包摂型社会を目指す教育実践の取り組み

昨年より，先述した現代的課題である「経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒」への教育支援に関する研究に取り組み，包摂型社会実現のための教育的アプローチを模索した授業・活動の成果を発表してきました。

写真④

こうした成果は，本校のこれまでの連携研究の実践が土台にあり，主体的に学び続ける人として成長し，他者への思いやりが育まれている（写真④）からこそ出せているものと考えています。